

ホタル を守り 育てる



ヘイケボタルは幼虫の期間が約10カ月、ゲンジボタルは9カ月から3年で、その間を水中で過ごします。安定した水質を保つために毎日の水替えは欠かせません。エサになる貝は市内の水路で採取しています。(豊中市 都市基盤部 水路課)

ホタルは日本人にとって古くからなじみの深い昆虫ですが、その種類は国内で40種類以上、そのうち発光するのは10数種類といわれています。その中でも有名なゲンジボタル、ヘイケボタル、ヒメボタルの美しい光を豊中で見ることが出来ます。

ゲンジボタル・ヘイケボタルを育てる

豊中で、高度処理した下水処理水を利用したホタルの人工飼育が始まったのは30年以上前。平成元年（1989年）から「苗の里」(原田南)で「ほたるの夕べ」として一般公開が始まり、初夏の風物詩となつて市民が楽しみにしています。

かつて水田や用水路が数多くあった時代には、豊中でもホタルはたくさん見られました。しかし、環境が変わり、ゲンジボタル、ヘイケボタルの成育に必要な、近くに土があり、幼虫のエサとなる貝が生息する水辺空間が失われていきました。やがて、幹線道路や工場、住宅地の開発と同時に進行した下水道の普及と処理技術の向上を背景に、下水道事業の一環として、潤いと安らぎのある水辺空間づくりが行われ、ホタル飼育のきっかけとなりました。

平成2年には、全国に先駆けた人工飼育の成功例で「国際花と緑の博覧会」に出展参加。豊中はホタル飼育の先進地と

して注目を集めることになりました。

現在は、ふれあい緑地「とよなか四季彩園」(自然学習センター(服部西町)12ページ参照)でも飼育が行われて、ホタルの舞う水辺環境の復活をめざしています。飼育を指導する小森住吉さん(元市職員)は、長年にわたり豊中市のホタル飼育にかかわってきました。経験から得た知識を伝える小森さんの話を聞くために、市外からもホタル愛好家が集います。



ほたるの夕べ

「とよなか四季彩園」自然学習センターでは、毎年ホタルの学習会を開催。ふれあい緑地内のせせらぎに子どもたちと一緒に幼虫を放流するなど、ホタルを通じて自然環境を考える機会を提供しています。

屋内で育てた幼虫は、サナギになる直前に蛍ドーム内のせせらぎに放し、成虫になるのを見守ります。わずか10日間ほどの成虫の間に求愛行動として発光するのです。光の語らいが幻想的な「ほたるの夕べ」には、毎年4千人もの人が訪れます。

ヒメボタルを見守る

春日町に住む那須野素子さんは、「50年ほど前のこの辺りは、ほとんどが畑で、初夏には夕方になるとホタルも飛んでいました。その頃はあまり気にも留めていませんでした」と話します。ふだんは通らない自宅近くの竹やぶで、ヒメボタルの乱舞に出会ったのは昭和51年(1976年)の5月、雨上がりの夜でした。「まさに幻想的としか言いようなない光に驚きました」とその時の印象を語ります。

その後、住宅開発が急速に進んでいく中で、残っている竹やぶにホタルがいることを知る地域の住民が市に薬剤散布の中止を申し入れました。それがきっかけとなり、ヒメボタルを守る住民の活動が始まりました。豊中市では、平成2年から3年に大規模な生態調査を行い、市内に約13か所の生息地を確認しましたが、開発などが進み、現在生息が確認されているのは春日町の1か所だけです。この調査を機に「豊中ヒメボタルを守る会」が発足し、春日町在住の生物

ヒメボタル
湿地に棲む陸生のホタルで、幼虫は陸生の貝を食べて育ちます。大阪府の準絶滅危惧種に指定されています。ゲンジボタルやヘイケボタルが尾を引くように光るのに対して、ヒメボタルはカメラのフラッシュのように点滅して光ります。

学者であつた川副昭人さん(故人)の指導を受けながら、発光数調査や各地の生息地との交流を図る「ヒメボタルサミット」などの活動を行ってきました。

平成14年には「ヒメボタル保護者会」(豊中ヒメボタルを守る会、地元自治会、とよなか市民環境会議アジェンダ21自然部会、豊中市)が結成され、生息地の保全活動や学習・観察会を行っています。

20年以上にわたり毎年、守る会のメンバーとともに発光数調査を続ける那須野さんは、「周囲が宅地化されて明るくなっているのが、以前よりもヒメボタルの飛ぶ時間帯が遅くなっています。緑が少なくなつて竹やぶの土が乾燥するのもヒメボタルの成育に影響します。残された自然を、できる限りそのままの状態で大切にして、見守り続けたい」と語ります。

現在豊中で唯一のヒメボタルの生息地は、かつては千里川が蛇行して流れる谷底にあたる場所でした。その土壌環境が成育に適したものであったと考えられます。豊中市は平成28年に「春日町ヒメボタル特別緑地保全地区」として指定し、永続的な保全を図っています。

